

私のカルテ

No. 3 8 8

大腸がんについて

津島市民病院
外科医長山東
雅紀さんどう
まさのり

今や、2人に1人ががんになる時代です。そのなかでも大腸がんは、年々増加しているがんのうちの一つです。最近のがんに関する統計では、男女合わせると、大腸がんにかかる人が最も多く、亡くなる人は肺がんに次いで2番目に多い結果となっています。大腸がんに限らず、様々ながんが増加している背景には、一つ目に高齢化社会が挙げられます。日本は世界最大の長寿国ですが、寿命が伸びる分だけ病気にかかる機会が増えているからです。もう一つは生活習慣の変化です。特に食生活の欧米化により、肉や加工肉を食べる機会が増え、肥満の割合が増えています。しかしながら、すでに私たちに根付いている生活習慣を変えることは容易ではありません。

では、もし皆さんが大腸がんになってしまったら、どのくらい治る病気なのでしょうか。実は、大腸がんは手術で完全に切除できれば、消化器がん中最も治る可能性の高いがんです。ステージ0ないしステージIであれば90%以上の患者さんが治る病気なのです。つまり、早期発見がとても大事だということです。

早期発見のために何をすればいいのでしょうか。それは年に一度、市の検診や会社の検診を受けてもらうことです。ご自身の便を検査し、目で見えないような血が混じっているかどうかをみる簡単な検査です。大腸がん検診を受ける方の割合は年々増えてはいますが、それでも半数以下にとどまります。すべての大腸がんがこの検診で見つかるわけではないですが、検査を受けないことには早期発見は困難です。また、せっかく検診を受けて異常を指摘されたにもかかわらず、放置してしまう方が少なくありません。

それでは、何歳から検診を受けるべきなのでしょうか。大腸がんは、30歳台後半から徐々に増加することが分かっていますので、少なくとも40歳になったら検診を受けるようにしましょう。また、65歳以降も大腸がんにかかる人はさらに増えていきます。会社の検診を受けていて、定年退職されたあと検診を受けなくなるケースをお見かけしますが、ご自身でも検診を受けるよう強くお勧めします。

さて、最近の大腸がんの手術についてお話ししたいと

思います。腹腔鏡手術という言葉をお聞きになったことがあるかと思います。従来の開腹手術では、傷は15cm～20cmと大きくお腹をあける必要がありました。腹腔鏡手術では、1～2cmほどの小さな傷を4、5カ所あけることで開腹手術と同じ手術が可能になっています。従来の開腹手術と比べて、腹腔鏡手術の良いところは、第一に傷が小さいため術後の痛みが少なく済みます。また、術後の腸の動きが早く回復するため、食事を早く再開することができます。手術中には、我々が肉眼で見えるよりも、はっきりとよく見えます。細い血管1本1本を拡大してみることができ、結果的に出血量が少なくなります。このように、様々な点で患者さんへの負担を軽減することで、早期退院・早期社会復帰を可能にします。

当院の現状を紹介したいと思います。当院でも2000年ごろから腹腔鏡下大腸がん手術を導入し、2013年以降大幅に増加し、現在では腹腔鏡手術が7～8割程度を占めています。全例に腹腔鏡手術が行われないのは、何度もお腹の手術をしたことがある患者さんや、腫瘍がとても大きい場合など、腹腔鏡手術が適さないケースもあるためです。当院では、消化器内科や放射線科と週1回のカンファレンスを行い、病気について話し合い、安全に十分考慮したうえで治療方針を決定しています。

最後に、大腸がんをはじめ、がんになる患者さんは増加しています。大腸がんは早期発見できれば治る見込みの高い病気です。少なくとも40歳を過ぎたら検診を受け、もし検診で異常を指摘されたら必ず精密検査を受けましょう。治療方針については我々に一度ご相談ください。

